

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：82406

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25293435

研究課題名(和文) 看護系大学における発達障害傾向学生に対するサポート・スペクトラム構築に関する研究

研究課題名(英文) Development of a support spectrum for nursing students with developmental disability characteristics

研究代表者

安酸 史子 (YASUKATA, FUMIKO)

防衛医科大学校(医学教育部医学科進学課程及び専門課程、動物実験施設、共同利用研究・その他部局等・教授)

研究者番号：10254559

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、看護系大学における発達障害傾向学生への効果的な支援方法と支援のあり方を明らかにすることを目的とした研究である。看護系大学に勤務する教員から教育上特別な支援を要する学生の特徴について調査し、発達障害傾向学生の行動特性スクリーニング・チェックリストを作成した。その後、チェックリストで特別な支援が必要と考えられた学生を1年間追跡し、どのように支援をするかについて明らかにした。発達障害傾向学生の特性は多岐にわたり、その特性により教員は教育困難と感じることが多い。しかし、特性を問題とせず、その特性をもちながらどう現実に対応するかを支援することが効果的な支援であると考えた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the actual situation of nursing students who demonstrate developmental disorder characteristics, and to establish an effective support model. This study examined characteristics of nursing students who needed special assistance for learning, and developed a checklist to screen behavioral issues of the target students. The checklist suggested six nursing students who might suffer developmental disorder and they were followed one year by nursing faculty. The interaction process contents between students and teachers were analyzed by using the Roy's Adaptation Model to facilitate transforming ineffective coping skills to effective ones. The current data indicate that nursing faculty felt challenges with mentoring the students with developmental disability characteristics which widely range. However, it is expected that reinforcing students' effective coping skills might lead further better learning process in bachelor's program.

研究分野：看護教育学

キーワード：発達障害

1. 研究開始当初の背景

日本学生支援機構の高等教育機関を対象とした障害学生支援に関する調査によると、2010年度において4年制大学で学ぶ障害学生の総数は8,149人であり、そのうち診断書を有する発達障害の学生(LD・ADHD・高機能自閉症等:以下「発達障害学生」とする)は865人であった。障害学生のうち、学校に支援の申し出があり学校が何らかの支援を行なっている学生の総数は4,904人であり、そのうち発達障害学生は692人を占めていた。さらに、日本学生支援機構の調査では、高等教育機関において発達障害または発達障害の疑いで支援を受けている学生は5,425人で前年度(4,795人)より630人の増加しており、年々増加の一途をたどっている。

看護系大学においても低学年の講義形式の授業では学習困難が浮き彫りにならないが、学年進行に伴い演習や実習の場面において、社会性やコミュニケーション、行動や情動面での対応の困難さが生じている学生が見受けられ、それぞれの大学で対応を行ってきた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、看護系大学に学ぶ発達障害傾向がある学生の実態を把握し、当該学生への効果的な支援内容の確立と、それを実行可能とする支援モデルの構築をすることである。具体的には、看護系大学の特徴を入れ込んだスクリーニング・チェックリストを開発する。11大学それぞれスクリーニングに該当した学生への個別支援を一定期間実施し、支援の内容と当該学生の変化を把握する。で集積したデータを基にメタ分析によって効果的な支援内容を明らかにし、効果的な支援内容を入れ込んだ大学内支援体制であるサポート・スペクトラムを構築することである。

3. 研究の方法

1) 看護系大学の特徴を入れ込んだスクリーニング・チェックリストを開発、実施する

発達障害の学生を支援している先進大学へのヒアリング

看護系大学教員が考える要支援学生の行動特性の把握

- (ア) 調査対象: 看護系大学 11校
- (イ) 調査期間: 平成 25 年 7 月中旬 ~ 8 月末
- (ウ) 調査方法: アンケートを託送調査法により実施
- (エ) 調査内容: 特別な支援を要する学生の行動特性とその場面
- (オ) 回答を特性ごとに分類し、カテゴリ化チェックリスト項目の選別
- (ア) カテゴリ化した項目が、支援の必要な学生 13 名と支援の必要のない学生 11 名とでどのように変わるかを各 3 名の教員で判定

- (イ) 判定期間: 平成 25 年 12 月上旬 ~ 平成 26 年 2 月中旬
- (ウ) 判定方法: 3 名の教員で同一対象者を判定。判定時、相談は行わず独自に判定を行う。
- (エ) 支援(必要・不要)と判定(陽性・陰性)とで Fisher の正確確率検定の実施
- (オ) 項目毎の教員間の判定の一致率算出; 判定者 3 名の結果がすべて一致しているものを「1」、一人でも異なっているものは「0」とし、全ての対象者で算出
- (カ) 一致率 70%以上を水準とし項目を選別し、一致率 60%以上の観察容易項目を一部追加

2) 当該学生への個別支援を一定期間実施し、支援の内容と当該学生の変化を把握する

個別支援の記録フォーム(基礎情報書式 A 票、経過記録書式 B 票、変化記録書 C 票)を作成する。

スクリーニング得点平均 6 点以上の学生に対する継続的な個別支援を開始

半年に一度、C 票に変化の状況を記載する。

3) 2) で集積したデータからメタ分析によって効果的な支援内容を明らかにし、それを取り込んだサポート・スペクトラムを構築する。

支援記録をロイ看護モデルで分析

モデルの看護過程の構成要素である、行動のアセスメント、刺激のアセスメント、看護診断、目標、介入、評価を参考に分析し発達障害傾向学生の行動の特徴と支援の方法について検討する。

演習・実習等で現在行っている合理的配慮と支援を行う上での課題について看護系大学 10 校に調査の実施

の結果をもとに、看護系大学における発達障害傾向のある学生に対する支援の課題とサポート・スペクトラムを構築する

4. 研究成果

1) 看護系大学の特徴を入れ込んだスクリーニング・チェックリストの開発

発達障害の学生を支援している先進大学へのヒアリング結果

京都大学、札幌学院大学、富山大学、信州大学、明星大学を視察し、ヒアリングを行った。ヒアリング結果の抜粋を以下に示す。

カウンセリングルーム、健康科学センター、教員からの情報提供、また入試の際の配慮申請情報から対象学生を把握し、**学生本人との話し合いの上で支援を実施**する。基本的には環境調整(試験の別室対応等)と人的支援(情報の構造化:手話や通訳など、他学生への配慮)を行う。障害学生個人を助けるのではなく、大学の教育活動そのものを助けるという考え方が京都大学の障害学生支援の本質である。(京都大学)

事実に基づいて話をしていくと入りやす

い。介入としては具体的かつ効果がある工夫を教えると良い。様々なことを経験する中で、失敗しつつもそれをリフレクションし、学んでいくことはできる。いかに、そのリフレクションのサイクルにのせるかが重要。しかし、**感情面でのリフレクションは苦手**なので、それはさせない方がよい。**支援には根気が必要**。効果がないことも多い。親を巻き込んだ方がよい。(富山大学)

特定の何かができなくても、工夫で対応が可能な場合はそれを補っていくのは合理的配慮と言える。工夫をしてもできない場合は仕方ない。**主観的な困り感がない学生には困ってもらっても良い**のではないかと考える。(信州大学)

一番大切なことは、発達障害を**学生自身が受容していない限り、先には進めない**ので、変にかばいすぎたり、手を出しすぎたりしないで、失敗体験からどのように今後の人生に生かすかを考えさせていくことである。支援だけを先走りしても難しい。スモールステップが必要であり、できないことを自覚させることも必要である。事実を学生自身に認識させながら、障害受容させていくことが、人生への指導のスタートになる。学生自身が自分で支援を要請できるスキルを身につけさせることが重要である。(明星大学)

看護系大学における特別な支援を要する学生の行動特性チェックリスト(24項目)の作成

看護系大学11校の教員から、要支援学生の行動特性として、計416個の回答が得られた。これらをカテゴリに分類し、重複する項目を整理した結果、7カテゴリ40項目となった。【文字の読み書きに関する課題(6項目)】【衝動性や不注意、集中力の欠如、規律を守れないと言った課題(8項目)】【コミュニケーションや対人トラブルに関する課題(14項目)】【状況に応じた適切な判断に関する課題(5項目)】【こだわりや環境への順応に関する課題(3項目)】【自尊感情の低さや不安感に関する課題(2項目)】【その他の課題(2項目)】

これらの項目から判別力があり信頼性が比較的高く観察の行いやすい項目で整理し、最終的に24項目とした(表1)。

3) 支援記録の作成

研究者間でブレインストーミングし、基礎情報A表、支援記録B表、変化記録C表を作成した。

1つ目の基礎情報書式は、行動特性チェックリストが含まれ、さらに「周囲の人が考える困り事・心配事およびそれに対する対象学生本人の認識」「対象学生本人が抱える困り事・心配事(本人から表明された支援ニーズ)」「将来に向けての対象学生の自己認識」「成育歴」「家族構成および家族歴」「伸長すべき長所」「特記事項」の8つのフィールド

から構成される。

表1

課題カテゴリ	項目	
・文字の読み書きに関する課題	1. 自分の考えを文章にすることが苦手である	
	・衝動性や不注意、集中力の欠如、規律を守れないといった課題	2. 忘れ物をするのがよくある
		3. 提出物の期限を守れないことがよくある
		4. 記録や資料等の管理や整理整頓が苦手である
		5. 遅刻や無断欠席をするのがよくある
		6. 日常生活において、気に入らないことがあると感情のコントロールが苦手である
・コミュニケーションや対人トラブルに関する課題	7. 笑顔が見られず表情が硬い	
	8. 目線を合わせられない	
	9. 適切な間合いを取ることができない(時間や距離感)	
	10. 周囲の人に迷惑をかけていることに気づいていない	
	11. 自分の思いや考えを相手に伝えることが困難である	
	12. ひとりで行動することが多い	
	13. 指示待ちで積極的に行動できない	
	14. グループワークに参加しない、または参加できない	
	15. 頑固で譲歩することができない	
・状況に応じた適切な判断に関する課題	16. 次に行動すべきことが分からなくなることがよくある(実習場面など)	
	17. 具体的な指示がないと動くことができない	
	18. 行動の優先順位を判断することが苦手である	
	19. 待つことができない	
・こだわりや環境への順応に関する課題	20. 予定の変更(スケジュールや受持ち患者など)になかなか対応できない(実習場面など)	
	21. 一度覚えた手順を変更することが難しい(実習場面など)	
	22. 特定のことが気になって頭から離れないことがよくある	
・その他	23. 微細運動や協調運動が苦手である	
	24. 周囲の心配に対して、根拠のない大丈夫と言うことが多い	

2つ目の経過記録書式は、「記載日」「場所・場面等」「課題・長所カテゴリ」「支援対象者」「具体的支援内容」「対象者の様子」「支援担当者(記録者)」の7つのフィールドから構成される。「課題・長所カテゴリ」は行動特性チェックリストにおける該当するカテゴ

りか、基礎情報書式の「伸長すべき長所」かのどちらかを記載する。

3 つ目の変化記録書式にも行動特性チェックリストが含まれ、さらに「周囲の人が考える困り事・心配事およびそれに対する対象学生本人の認識の変化」「対象学生本人が抱える困り事・心配事の変化」「本人の行動特性上の変化」「変化の背景」「支援組織（体制）の変化」「長所の伸長の状況」「特記事項」の8 つのフィールドから構成される。変化記録書式は、支援による変化を記録するためのものであり、3 ヶ月から6 ヶ月に1度記載するものとした。

4) チェックリストを元に4大学で特別な支援を必要とした6名の看護学生(表2)を判別した。

表2

事例	事例の特徴
A	物忘れ・指示された時間や日時を守れない・学修に集中できない
B	臨地実習における多重課題に対する行動が困難
C	整理整頓が苦手な忘れ物が多く、一人で行動していることが多い
D	環境に適応できずパニックになる
E	必要な情報を選択することが困難、レポートの提出期限が守れない
F	約束の時間を失念する、クラスメイトとの協力が困難

5) ロイ看護モデルによる事例の分析

今回6大学で実施された発達障害傾向の学生への支援事例6事例をロイ適応看護モデルの看護過程の構成要素に沿って分析した。6事例の看護診断を表3に示した。

表3

	看護診断
A	# 記憶障害 # 非効果的コーピング
B	# 非効果的コーピング # 防衛的コーピング
C	# 非効果的コーピング # 非効果的行動計画
D	# 非効果的コーピング
E	# 非効果的行動計画
F	# 非効果的コーピング

ロイ適応看護モデルで示される看護過程は、まず対象者の行動を十分に観察することから始まる。今回、支援者によって観察され

た6事例の行動の特徴は、忘れ物が多い、記録ができない、整理・整頓ができない、協調性に欠ける、集中力の欠如、状況に対処できない、睡眠パターンの混乱などであった。これらの行動に影響を及ぼしていた刺激は、特に状況に対処する能力に自信がないことが挙げられた。行動と刺激のアセスメントの結果から6事例に共通して挙げられた看護診断は、非効果的コーピング、非効果的行動計画などのコーピング反応の問題であり、対象事例が適切なコーピングを獲得できるように支援が行なわれていた。支援の方法は行動に影響を及ぼしている刺激に沿って分類することができた。今後支援事例を増やしロイ適応看護モデルに基づき対象の行動、行動に影響を及ぼす刺激、看護診断、刺激に対する支援方法を詳細に分析していくことで発達障害傾向学生への適切な支援方法の確立が期待される。

ロイ適応看護モデルにおける看護は、人と集団の適応能力を促進し環境との相互作用を高めるように支援することにある。発達障害傾向学生が環境との相互作用を高めるためには、今回6事例の発達障害傾向学生に観察された、非効果的コーピングから効果的コーピングの獲得に向けた支援が期待されるといえる。

6) 演習・実習等で現在行っている合理的配慮

看護系大学10校の調査結果から得られた回答を整理すると以下の14項目となった。

- 実技試験は複数回行うようにする
- 時間外に技術指導を行う
- 演習の欠席時は個別に補講を行う
- グループ担当の教員は経験豊富な教員とする
- グループ編成時、支援が必要な学生が重ならないように、面倒見の良い学生を配置する
- 口頭説明だけでなく、文書を配布する
- 文書は文字ばかりでなく、図を多く取り入れる
- 異性に苦手意識がある場合は、同性のみのグループ、教員が関わる
- 実習病院までの通学距離や病棟の雰囲気等を考慮して実習先を考える
- 実習時は、受け入れが良く、多重課題とならない患者を選定する
- 実習指導者と学生の特性について情報共有する
- ケアを行うときは、学生と教員とが一緒に行うようにする
- 記録指導に時間をかけ、出来たことを振り返る
- 実習から帰る前に、記録の内容や優先順位を教員と一緒に確認する

7) 看護系大学における発達障害傾向の学生への支援の課題

看護系大学 10 校の調査結果から得られた回答を整理すると以下の 10 項目となった。

支援は各領域単位となっており、教員間の情報共有が十分ではない。

カウンセラーとの情報共有が十分ではない。

4 年間継続した支援をする体制が整っていない。

看護師として就職させて良いのか教員が悩む。

教員が支援することが多いが、対応する教員に負担がある。

どの程度配慮すれば良いのかの基準がない。

教員は支援の専門家ではないため、支援方法が分からない。

臨床側の理解不足がある。

演習や実習時、一人にかかる時間が多くなり、指導に偏りが生じる。

同一グループメンバーの負担が大きい。

8) 看護系大学における発達障害傾向の学生へのサポート・スペクトラムのあり方について

看護系大学における発達障害傾向の学生への支援の課題は、現在十分に行えていないことである。これらの課題を解決できる組織とシステムが、発達障害傾向の学生支援に必要なサポート・スペクトラムであると考えられる。

課題の に関連として、教員が学生への支援に困った時に気軽に相談できる支援システムを作り、教員が指導で孤立しない体制を作る。特に孤立しがちな実習指導に関してはスーパーバイザー制で重層的な指導体制を構築する。

課題の に関連として、特別な支援が必要な学生に対しては、その学生の特徴を見極めて、合理的な配慮を含む支援を検討、評価するための支援の専門家を含んだ組織を作り、4 年間の継続支援の中で PDCA サイクルを回していく体制を作ることが望ましい。その際に、Roy 適応看護モデルを活用し、対象学生の行動、行動に影響を及ぼす刺激、看護診断、刺激に対する支援方法をチームで検討していくことで、非効果的コーピングから効果的コーピングの獲得に向けた支援方法の確立を目指す。

課題の に関連として、発達障害の学生に対する合理的配慮についての FD に臨床側の看護師の参加を促し、教員と臨床側が共通認識で発達障害傾向学生に関わる体制を作る。

課題の に関連として、その学生の特徴にあった業務を学生と一緒に考え、就職先の病院管理者にその学生の優れている点と配慮しなければならない点について話し合う場を設ける。

これらのような組織とシステムを作ることに加えて、ガイドラインを作成して、FD を通じて教員全体で話し合う文化を構築する

が必要であると考えられる。

また、効果的な支援については、「可能であればカミングアウトして、その学生に合った合理的配慮について学生と一緒に考え、他学生や他教員と情報を共有する」、「叱責すると逃避してしまう可能性があるため、叱責しないことを基本とし、強みの部分については褒める」、「学生には事実に基づいて話をしていく。学生自身が受容しない限り前に進まないことを教員も理解し、変にかばいすぎたり手を出しすぎたりしない」といった関わりが効果的であると考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

(1)北川明、原田直樹、増満誠、安酸史子、松浦賢長、金城芳秀、二重作清子、山住康恵、砂川洋子、佐藤亜紀、日高艶子、吉武美佐子、富山裕子、金城祥教、福島龍子、梅崎節子、岡村純、藤川真紀、正野逸子、宮林郁子：看護系大学における特別な支援を必要とする学生の行動特性確認リストの開発、第 34 回日本看護科学学会、2014. 11. 名古屋。〔図書〕(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安酸 史子 (YASUKATA, Fumiko)
防衛医科大学校・その他部局等・教授
研究者番号：10254559

(2) 研究分担者

砂川 洋子 (SUNAGAWA, Yoko)
琉球大学・医学部・教授
研究者番号：00196908
金城 祥教 (KINJOU, Yoshinori)
名桜大学・健康科学部・教授
研究者番号：00205056
福島 龍子 (FUKUSHIMA, Ryuko)
純真学園大学・保健医療学部・教授
研究者番号：00299984
松浦 賢長 (MATSUURA, Kencho)
福岡県立大学・看護学部・教授
研究者番号：10252537
増満 誠 (MASUMITSU, Makoto)
福岡県立大学・看護学部・講師
研究者番号：10381188
北川 明 (KITAGAWA, Akira)
防衛医科大学校・その他部局等・准教授
研究者番号：20382377
竹末 加奈 (TAKESUE, Kana)
活水女子大学・看護学部・講師
研究者番号：20551683
三並 めぐる (MINAMI, Geguru)
福岡県立大学・看護学部・講師
研究者番号：20612948

山住 康恵 (YAMAZUMI, Yasue)
防衛医科大学校・その他部局等・講師
研究者番号：30553052
金城 芳秀 (KINJOU, Yoshihide)
沖縄県立看護大学・その他の研究科・教授
研究者番号：40291140
宮林 郁子 (MIYABAYASHI, Ikuko)
福岡大学・医学部・教授
研究者番号：40294334
白水 麻子 (SHIROUZU, Mako)
聖マリア学院大学・看護学部・准教授
研究者番号：40435368
日高 艶子 (HIDAKA, Tsuyako)
聖マリア学院大学・看護学部・教授
研究者番号：50199006
吉武 美佐子 (YOSHITAKE, Misako)
福岡女学院看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：50320388
小林 裕美 (KOBAYASHI, Hiromi)
日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・

教授

研究者番号：50369089

岡村 純 (OKAMURA, Jun)

日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・

教授

研究者番号：60316213

二重作 清子 (FUTAESAKU, Kiyoko)

純真学園大学・保健医療学部・看護学科教

授

研究者番号：70321221

正野 逸子 (SYONO, Itsuko)

産業医科大学・産業保健学部・教授

研究者番号：80280254

佐藤 亜紀 (SATO, Aki)

産業医科大学・産業保健学部・講師

研究者番号：80435130

原田 直樹 (HARADA, Naoki)

福岡県立大学・看護学部・講師

研究者番号：80598376

堂山 裕子 (TOUYAMA, Yuko)

琉球大学・医学部・講師

研究者番号：90468075

照屋 典子 (TERUYA, Noriko)

琉球大学・医学部・助教

研究者番号：10253957

伊礼 優 (IREI, Masaru)

名城大学・健康科学部・准教授

研究者番号：90336983

梅崎 節子 (UMEZAKI, Setsuko)

純真学園大学・保健医療学部・講師

研究者番号：10588784

安藤 満代 (ANDOU, Michiyo)

聖マリア学院大学・看護学部・教授

研究者番号：10284457

谷 多江子 (TANI, Taeko)

聖マリア学院大学・看護学部・講師

研究者番号：10441883

藤川 真紀 (FUJIKAWA, Maki)

福岡女学院看護大学・看護学部・助教

研究者番号：30570121

松浦 江美 (MATSUURA, Emi)

活水女子大学・看護学部・准教授

研究者番号：20363426

西村 優紀美 (NISHIMURA, Yukimi)

富山大学・学内共同利用施設等・准教授

研究者番号：80272897

岩瀬 貴子 (IWASE, Takako)

活水女子大学・看護学部・准教授

研究者番号：80405539

馬場 保子 (BABA, Yasuko)

活水女子大学・看護学部・助教

研究者番号：70623205

(3)研究協力者

大城 凌子 (OSHIRO, Ryouko)

葛原 誠太 (KUZUHARA, Seita)

小柳 康子 (KOYANAGI, Yasuko)

坂梨 左織 (SAKANASHI, Saori)

石橋 曜子 (ISHIBASHI, Yoko)

柴田 裕子 (SHIBATA, Yuko)